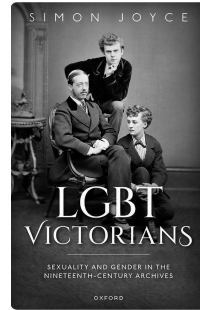


## 書評

Simon Joyce, *LGBT Victorians: Sexuality and Gender in the Nineteenth-Century Archives*  
(Oxford University Press, 2022)



川津 雅江 (名古屋経済大学 名誉教授)

ヴィクトリア朝の人々は性的偽善者であるというスティーヴン・マーカス (*The Other Victorians*, 1966) の見方は、ミシェル・フーコー (*Histoire de la sexualité: la volonté de savoir*, 1976) によって一蹴された。それ以来、ヴィクトリア朝時代はセクシュアリティ史家やクイア理論家たちにとって重要な時代になっている。最近の研究動向としては、1885年の刑法改正法成立以降、男性間の親密な関係が軽犯罪とされるようになったヴィクトリア朝ではなく、むしろ同性愛に対し、驚くほど寛容であったヴィクトリア朝に注目している。たとえば、クイア理論家のシャロン・マーカス (*Between Women*, 2007) は、この時代には、女性間の欲望と結婚内の異性間の欲望は対立せず、両立していたと論じた。文学的領域では、ホーリー・ファーノー (*Queer Dickens*, 2010) がクイアを異性間の結婚や再生産とは異なるものとして定義して、チャールズ・ディケンズの小説にアプローチし、ヴィクトリア朝社会や家族の中に受け入れられていた同性愛や衝動を明らかにした。

本書『ヴィクトリア朝のLGBTたち』も、多様なセクシュアリティのあり方に寛容であったヴィクトリア朝に軸足を置き、あえてオスカー・ワイルドを議論の中心から外している。著者のサイモン・ジョイスが時代錯誤であることを承知の上で本書のタイトルにLGBTを選んだのは、それが性的マイノリティを包括的に指す用語として現在最も普及している頭字語だからである。そしてセクシュアル・アイデンティティ (lesbian, gay, bisexual) のカテゴリーには “asexual, pansexual” など、ジェンダー・アイデンティティ (transgender) のカテゴリーには “intersex, nonbinary, bi-and agender”

なども含める(9)。ジョイスは、LGBTのように、セクシュアリティとジェンダーが連携していると同時に相互識別しているようなアイデンティティの考え方が19世紀に生じていたことを、当時のさまざまな史料を綿密に分析することによって明らかにし、それによって現代の多様な性的マイノリティ間の連携を強化するための基礎を築こうとする。

「序文」は、19世紀初期のアン・リスターを記念してヨーク市シビック・トラストが掲げた「虹色銘板」の話から始まる。2018年8月の銘板はリスターを「ジェンダー非同調の起業家」と紹介したが、ラディカル・フェミニストからの批判を受けて、2019年3月の銘板は「レスビアン・日記作家」に修正した(1-2)。ジョイスは、先行のフェミニズム史家やセクシュアリティ史家たちが、この2枚の銘板のように、それぞれ歴史的人物のアイデンティティをジェンダーかセクシュアリティのどちらか一方でしか定義してこなかったことを問題視する。しかし、「ジェンダー非同調」が「＜トランスジェンダー＞の代替語」(3)であるならば、「トランスの人はレスビアンでありうるし、レスビアンはトランスの人でありうる」(7)。本書はこうした可能性の問題に対し、「ジェンダーの表現と性的指向」が密接に結びついているという仮定に基づいて、論を展開しようとする(27)。

本文は3部構成からなる。第1部「融合する概念」では、性科学登場以前と以後の言説を扱う。第1章「1820年頃—レスビアン出現の諸様相」では、リスターの日記、エジンバラの女子寄宿学校教師ジェイン・ピリーとマリアン・ウッツが名誉毀損で提訴し勝利した裁判記録、そして、アメリカのニューイングランドで一緒に住み、洋服店を経営していたチャリティ・ブライアントとシルヴィア・ドレイクの手紙や日記などを丹念に分析し、19世紀初期における女性間の欲望を概念化するためのモデルの多様性を明らかにするとともに、性的指向が「ジェンダーの転換」(67)として表現されていることを指摘する。またリスターは公には男性として装いながら、自己のアイデンティティを、女性として自己同一化するカテゴリー(リスターの恋人マリアナ・ロートン)と、男性として自己同一化するカテゴリー(同性愛に関するギリシア古典に詳しい隣人ミス・ピックフォード)の中間のカテゴリーに位置付けた。ジョイスはこれを「現代のトランス男性の先駆者」(61)として読む。第2章「ウルリヒスのなぞ」では、「現代のゲイ運動のバ

イオニア」(71)であるドイツの法律家カール・ハインリッヒ・ウルリヒスの1864年から1880年までの12のパンフレット(死後一冊にまとめられて出版。英訳は*The Riddle of “Man-Manly” Love*)における思考の進展を辿る。ゲイ男性は「男性の身体の中に女性の魂を宿す」(*anima muliebris virili corpore inclusa*)というウルリヒスの考えは、20世紀を通じて二項対立の本質主義として批判されてきた(72)。しかし、ウルリヒスは、「ウルニング」(男性同性愛者の意味)を「第三の性」もしくは「両性具有者」(現在のインターセックス)であると考え、その権利の擁護を主張した(76)。また、出生時男性が割り当てられたが、「女性」として生活し、他の男性と関係を持った同時代のフレデリック・ブランクを、「ウルニング」の下位範疇の「ヴァイブリング」(男性的男性に惹かれる女性的男性の意味)に入れた(83)。ジョイスによれば、ブランクのような「ヴァイブリング」は今でいう「トランスジェンダー女性」(89)である。同章は最後に、ウルリヒスに影響を受けた性科学者たち、『性的精神病理』(1886)のリヒャルト・フォン・クラフト＝エビングや『服飾倒錯者』(1910)のマグヌス・ヒルシュフェルトも、セクシュアル・アイデンティティとジェンダー・アイデンティティの関係を論じていたと指摘する。

第2部「ヴィクトリア朝の性科学と女々しさの問題」では、1895年のワイルド裁判後の同性愛に対する激しい嫌悪感が蔓延する中、いかにイギリスの同性愛擁護者たちがドイツの性科学者たちの考えに抵抗あるいは修正したのかを考察する。第3章「ジョン・アディントン・シモンズと倫理的同性愛の問題」では、詩人・文芸批評家のシモンズの思想を分析する。シモンズはウルリヒスの熱心な読者であったが、当時のイギリスにおける男性の「女々しさ」恐怖の風潮によって、ウルリヒスの「ヴァイブリング」のような概念を排除しようと努めた(119)。『回想録』(出版は第二次世界大戦後)で性的履歴を語るとき、シモンズは自己のセクシュアル・アイデンティティを「ヴァイブリング」でも「マンリング」(女性的男性に惹かれる男性的男性の意味)でもなく、その中間の「ミッテル・ウルニング」(男性的男性に惹かれる男性的男性の意味)であるとした。また、『ギリシア倫理の問題』(1883)などでは、古代ギリシアの「美徳の理想」たる同性愛とウォルト・ホイットマンの詩における「民主的な同志関係」の融合を目指した(121)。しかし、

特権階級に属しているシモンズが実際にパートナーとして選んだ男性は、彼自身とは年齢や階級が違うものだった。一方、第4章「中間の性へーエドワード・カーペンターのクイアなパリンプセスト」では、多くの点でシモンズと対照的な詩人・社会主義思想家のカーペンターを取り上げる。カーペンターは『同性の愛』(1895)や『見知らぬ人々』(1897)などで、同時代のフェミニスト「新しい女」の思想と同調することによって、ワイルド裁判以後の同性愛擁護の新しい形として、ドイツの性科学の「クロスジェンダーの同一化」にそった考えを示した(173)。また、『未開民族における中間的タイプ』(1914)では、ヒルシェフェルトの「性的中間者」のように、「性の中間的タイプ」をジェンダーの二分法を超えた第三の性として見なした(186)。

第3部「ゲイ男性／トランス女性」では、ジェンダーの移行性の問題を扱う。第5章「二人の女性が劇場のトイレに入るーファニーとステラの裁判」では、生まれが男性のステラ・ポールトンとファニー・パークの1870年から71年までの裁判の記録謄本や当時の報道を精査する。1980年代以降のセクシュアリティ史家たちはワイルド裁判の枠組みで二人の裁判を読み、迫害を逃れた男性同性愛の「異性装者」として二人を見なした(192-93)。これに対し、ジョイスは、被告側の弁護士が「男性は、ここで告発されている忌まわしい犯罪を犯すために婦人用のトイレに行くだろうか」(196)と主張したこと、被告側の証人や報道が二人に言及するときジェンダーが混乱した代名詞の使い方をしたこと、当人たち自身が女性名を好み、女性として自己表現してきたことなどに注目し、それらは二人が「トランスジェンダー女性」(208)であることを示しているとした。第6章「移行する身体ーヴィクトリア朝後期のポルノにおけるトランスな好奇心」では、当時の同性愛ポルノの性とジェンダーの身体表現に焦点を当てる。『平野の都市の罪』(1881)では、実在のファニーとステラがセリナとローラの名で登場する。シス男性(出生時の性が男として割り当てられ、性自認がそれに一致している人)の男娼ジャック・サウルはエヴェラインの名前で女装して舞踏会に参加するが、そこで出会ったセリナとローラと交わったあと、女性として生きるようになる。その続編『ローラとエヴェラインからの手紙』(1883)では、ローラとエヴェラインは、「肛門-膣」(“*arse-quim*”) (248)と

いう解剖学的にインターセックスの身体を持ち、他の男性とのアナルセックスの結果、身体のレベルにおいて「ジェンダーの移行」(251)が起こったとされる。『テレニー』(1893)では、シモンズのように、男性同性愛と女性性を結びつけることに批判的で、同性愛カップルは相互によく似ていて、「補完的なジェンダー役割」(238)がない。フランスのポルノ『ヴァイオレットのロマンス』(1891)では、シスジェンダーの異性愛セックスから、バイセクシュアル、レスビアン、インターセックスまでも提示されており、現代的な連携の考えを垣間見ることができる。最後に「コード」では、本書でワイルドを詳しく扱わなかったのは、裁判で敗訴した彼はヴィクトリア朝というよりも20世紀に属しているからであるとする(259)。

本書はたえず多くの先行研究に言及し、それらとの違いを詳述しつつ、各章間の相互引証も頻繁に行っているのも、一読で論旨をつかむのはかなり困難である。しかし、ジョイスは献辞の中で、自らを「トランスジェンダーの子ども」(vii)の親であることを告白し、その経験なしに本書は生まれなかったと述べている。まさにその言葉どおり、本書は、現在ならばトランスジェンダーと呼ばれるような人々がすでにヴィクトリア朝時代に存在していたことを明らかにした。この点において、本書はジェンダー史やセクシュアリティ史研究に新生面を切り拓いたと言えるであろう。異性装や異性名の通称や第三人称代名詞などの外的指標や両性具有のような解剖学的指標にトランスジェンダーの視点からアプローチする手法は、たとえば18世紀のロンドンでどちらの性か賭けの対象になったフランス王の密使デオン・ド・ボーモンのような歴史的人物の読み直しを促すに違いない。